

自分や家族・友人の生活を良くするために 保健の学びを「今日からの行動」につなげる

保健体育の先生には、「体育」を通して生徒の心身の成長を支えたい、という情熱をもたれた方が多いと思いますが、「保健」にはどんな想いをおもちでしょうか。その授業に可能性を感じ、夢中になった先生の実践をご紹介します。

取材・文／松井大助
撮影／松本美緒



保健体育
今田英樹先生

大学卒業後、1年間の非常勤講師を経て、広島女学院中学高校の教員に。昨年度までSGH校であった同校で、生徒には「もう一つのSGH」として「生活をぐーんとよくする保健の授業」というキャッチコピーも発信している。ICT機器係として、校内でのICTの活用も推進。

生徒に対する想い

自分で考えて行動するための「知識」と「実践力」を

広島女学院中学高校の今田先生は、体育の授業中に生徒の「できた！」という顔に出会えるのが好きで、教師になった。だから、当初の関心はもっぱら体育にあり、保健の授業は定期テストの出題のためだけにやっていたようなものだった。

でも、そんな姿勢では生徒に失礼だ。保健の授業も「この子たちの未来に少しでも残るものにした」。そう思うようになってから、意識が変わったという。

「生徒に何を残せるか考えたとき、保健で学んだことをもとに『自分で考えて行動を選択できる』ようになってほしいと思っただけです。保健で学ぶのは生活に関わる大切なことばかり。僕ら教員がおざなりな授業をしていたら、その価値を損ねてしまう、と思うようになりました」

そこで今田先生は、生活との結びつきを実感できる保健の授業を志向するようになる。1学期は「大学生や社会人になって仲間から酒やタバコをすすめられたらどうする？」と問いながら喫煙・飲酒・薬物乱用について学び、2学期は「付き合う人ができたら」という未来を見つけて性教育に取り組み、3学期は「受験勉強や仕事でストレスがたまったら」という想定のもとで心の働きやストレスへの対処法を学習する、といったように。

もともと、今田先生は「正しい保健の知識を身につけても、それだけで『実践』できるわけではない」とも思っている。

「詰め込みでは意味がなくて、飲酒でも性的なことでも、行動の選択を迫られたときに『枝葉の知識ではなく肝心なことを頭の中から引き出せるか』、そして『自分が正しいと思う選択をまわりの空気に流されず主張できるか』が大事だと思うんです。ですから授業では、学んだなかで各自が重要だと思ったことを自分の言葉で発していく、ということも重視しています。授業で1回頭の中に入れたものを『自分のもの』にしてほしいからです」

知識を知識のまま眠らせず、その知識をもとに具体的なアクションまで起こせるように。保健で学んだことを「今日からの行動」につなげようと、今田先生は生徒に投げかけるようになった。

授業の実践

なぜその行動を選択するのか 自分の意志や理由を育てる

2学期に約10時間かけて取り組むのが性教育だ。教科書の内容を踏まえつつ、今田先生が組み立てた構成で、週1回の授業を2年生に対して行っている。

前半戦でふれるのは命誕生のドラマ。月経の仕組み、性交から着床、胎児の成長、分娩のことなどを動画も交えて学び、奇跡的な確率のめぐりあわせで命が生ま



学習内容について3人組で調べて話し合っ理解を深め、最後に発表するのが授業の基本。各グループにはパソコンも配布、そこから今田先生が用意したプリントや動画およびインターネットにアクセスできる。要点をまとめやすいホワイトボードも活用。



れることを共有する。次いで、母が我が子に送った著名なあいさつ作文の例を引 き合いに出して、「もし自分に子どもがで きたらどんな言葉を送りたいか」というお 題で、生徒もあいさつ作文に挑戦。生 まれたあともさまざまな人に見守られて 命が育っていくことに思いを馳せる。

そのうえで、命誕生のプロセスを途中 でやめる人工妊娠中絶と、その選択をせ ざるを得なかった人の事情も学ぶ。さら に「産もうか、産むまいか」という状況にな る前に何が選択できるかも考えよう、と して、避妊についても学習する。

「性教育は照れくさくて最初は少し嫌 でした。でも、特にうちは女子校なので、 卒業してからあまり免疫がないまま男子 と関わるようになる子もいるんですね。



啓蒙スローガンの発表では、なぜそれを伝えたいと思った のか、理由まで説明することに。プリントなどは見ずに、自 分の頭の中に入った知識をもとに話すことも求めている。

避けて通つてはダメだと思つたのです」

毎回の授業は基本、生徒が隣同士で、 先週学んだことを説明し合うことから始 める。資料は何も見ずに自分の言葉で、 知識を自分のものにするための練習だ。

本題に入つてからは、3人組の学習が 基本になる。各グループが今田先生の用 意したA・B・Cの資料のいずれかを読み、 パソコンで調べ物もする。続いてA・B・C のことを調べた生徒が全員揃う3人組 になり、知り得たことを説明し合い、情 報を統合し、学習内容への理解を深める。 いわゆるジグソー法の学習だ。

そのうえで各グループが「資料の写し ではない、自分たちで考えた図や説明 文」で学んだことを発表。さまざまな発 表にも挑戦して、月経の仕組みを学 んだ授業ではホワイトボードに情報をま とめ、性交から着床までの過程を学んだ 授業では、各グループがパソコンを使い Googleサイトでホームページを作成した。

授業の終わりに、毎回、生徒が振り 返りシートに今日の気づきや感想を書く。



授業の最後は振り返り。毎授業行うことで生徒も書き慣 れてきて、また、授業で何を学んだか、どんなことを感じたり 考えたりしたか、ということを生徒が自覚しやすくなる。

「生徒の心がどう変化したのか、経過が わかるようにすることも大事にしたいん です。ポートフォリオの位置づけですね」

また、学んだことが身についたかチェッ クする定期テストでは、穴埋め問題は出 さず、記述式にしているそう。語句や データを暗記することより、例えばこの 先、性行為をするときや妊娠をしたとき に、「こうだからこうする、と、行動の最 後の選択をする『理由となるところ』を 覚えてほしい」という狙いからだ。

自分や人を大切にするために 知識を学び、伝えていく

2学期の最終授業では、「学んだこと をみんなに伝えていけば、まわりの人の 生活もよくなるかもしれない」として、 同世代へ向けて性教育の啓蒙スローガン を考えた。今田先生が改めて強調する。

「資料を見返してもかまいませんが、そ こにある言葉そのままではなく、自分た ちの言葉で伝えてください。そのほうが 同世代にはきつと響くはずだから」

今田先生が生徒に語りかけた。

「将来こうやって発信するかどうかは別 として、パートナーになる人には必ず自 分の思いを伝えてください。相手との関 係を重視するあまり、結果的に、大切に しないといけない自分の体をないがしろ にしてしまうことがあります。そうなっ てほしくないのです、今まで学んだこと を頭の中に置いて、行動を選択してほしい です」

20分のワークのあと、生徒たちからは 次のようなスローガンが披露された。

「なんでするん？ 欲しいわけじゃない んでしょ？ ホテル行くよりスタバいこ？」。

子どもが欲しいわけじゃないのに、リスク があることを軽々しくするより、おいしい もの食べて時間を過ごすほうがよくな い？ という思いを込めました」

「母として 抱え込まないで 相談を」。

例えばできちゃったと思つたら、一人で悩 まず、親とかパートナー、友人、病院に相 談してほしいと思つたからです」

「カモンベイビーNSD」(ヒット曲 のもじり)。NSDは「No Smoking & No Sex」の略で、出産前は子どもを健 康に育てるためにタバコやお酒をやめよ う、という意味を込めました」

「ちょっと待って。言える勇氣と聞く勇 氣。嫌なことは嫌という勇氣と、相手(男 性)も聞く勇氣をもつてほしいからです」

「コンドーム 装着時が潮時だ。コンド ームは射精前じゃなく挿入前にしないと 意味ないよ、と伝えたいと思いました」

そうした発表を受け、ついで、最後に

■ 広島女学院中学高校(広島・私立)



School Data

普通科/1886年創立
生徒数(2018年度)1289人(女子のみ、うち高校生は633人)
進路状況(2017年度)
大学182人・専門学校/各種学校2人
〒730-0014 広島市中区上織町11-32
TEL 082-228-4131
URL <http://www.hjs.ed.jp/>

Outline

「自分を愛するように隣人を愛しなさい」といったキリスト 教の教えを基盤とする学校。教科授業や一般行事のほか、礼拝やキリスト教行事、聖書の授業があり、それらを通 して「自らを正しく受け入れ、他者のために祈り行動できる」人格を養い、「身につけた知識をどのように用いるの か」を学ぶ。昨年度までSGH校でもあり、「のびやかに、し なやかに、世界へ」というスローガンのもと、対話力を養う 総合学習などにも注力。



本質的な学びにどうつなげるかは 教科が違って情報交換できる

地歴・公民科
加藤弘輝先生

今田先生とは授業の展開の仕方やテストの在り方について、普段から情報交換しています。例えば、今田先生はICTに詳しいので、私が授業への活用の仕方を相談したり。共感しているのは、今田先生がただ学校のICT環境を整えればよいとは思っていないで、「生徒が将来『自分でICTを使いこなせるようになる』にはどう触れさせればいいのか?」を考えていることです。授業で使える、というのがゴールではない。

また、今田先生は保健のテストを論述に切り替えたのですが、そこでは僕のほうからお伝えできることをお話ししています。論述テストは、採点が難しく時間もかかる、という点がネックなのですが、僕自身、以前から、社会科のテストで『自分で考えて書く』ことを生徒にさせたくて、設問や採点の仕方を試行錯誤してきた経験があったからです。

生徒が面白くなって自学自習するような本質的な学びにどうつなげるか、その方法論的なことは教科が違って共有できると思っています。

「教師が生徒を変える」から「生徒が自ら育とうとする」へ
今田先生は、もともと教師になるつもりがなく、スポーツを学ぶために体育大学に通っていた。それでも一応教員免許は取るうと教育実習に行ったら、「生徒とできた喜びを共有する」醍醐味を知り、これが天職と感じたそう。大学卒業後、1年間の公立中高の非常勤講師を経て、広島女学院中学高校の教師になった。

だが、天職と思った教師の仕事は、必

授業ができるまで

「教師が生徒を変える」から
「生徒が自ら育とうとする」へ



1 知識を自分のものにすることができるよう 学んだことを自分の言葉で表現させる

今田先生の授業では、冒頭で前回学んだことを生徒が隣同士で話し合うほか、今日の学習内容についても3人組でおののが調べたことを説明し合って理解を深め、最終的にホワイトボードやホームページにまとめて発表している。そうした活動で、生徒が知識を自分のものにすることを狙っている。

2 情報を取捨選択する力を鍛えるために あえてたくさんの情報を提供する

3人組による調べ学習では、今田先生は意図的に分量多めのプリントを生徒に提供。また、生徒がパソコンを使ってインターネットで情報収集することも推奨している。情報があふれるほどある現代社会において「必要な情報とそうではない情報を取捨選択する」という力を高めてほしいからだ。

3 ICTの使い方を生徒が自力で学ぶように あえて大雑把な運用を心がける

今田先生の保健の授業では4月からグループでパソコンを使うが、細かいレクチャーはせず、インターネットで調べるときの注意点を紙1枚で最初に示すほかは禁止事項も設けず、どう使いこなすかは生徒にゆだねている。生徒は最初こそ手間取るが、互いに教え合ってどんどん使い慣れていくそうだ。

4 体育でも3人組やICTの活動を導入 振り返る力や相手のために伝える力を育む

今田先生はマット運動などの体育でも、3人組で気づいたことを言い合う活動や、タブレットで動画を撮って動きを確認する活動を始めた。「ダメ出ししたら相手が傷つくかも」と怖がる生徒もいるので「相手のために指摘する」「指摘を前向きに聴く」関係をお互いに築いていこう、とも強調している。

ずしも順風満帆とはいかなかった。

勤めて4年目には、指導の在り方を根本から問われる失敗を経験する。生徒ができるようにと懸命に指導するも、生徒には単なる押しつけにしか過ぎないこともあることを経験したのだ。このままではダメだ、何かを変えないと、思った今田先生は教育コーチングを学んだ。

「そこで出会ったのが『人は育とうとする生き物だ』『人は自分の中に答えをもっている』という考え方でした。これだ、と思ったんですね。それまでの僕は傲慢にも『人は変えられる』と思っていました。だから『生徒の行動を自分が管理して変えよう』とした。でもその変化は見せかけで長続きしません。大切なのは『生徒が自分で気づいて変わろうとする』ことで、教員にできることがあるとすれば、そうした気づきが生まれるきっかけを与えることではないかと思うようになったのです」

教師の指示・説明を減らし
生徒の気づきを待つように

保健の授業でも紆余曲折があった。新人の時は、先輩が用意してくれた台本的なものをただなぞるような講義。それでは生徒に失礼だ、と2年目からは保健の教材研究に取り組み、プリントも自作し、説明に力を入れた。

「でも、こちらの話にあまり興味がなさそうなんですよね、生徒たちが(笑)」

保健の授業に真剣になったからこそ悔しかったし、モヤモヤしたが、しばらくは打開策を見出せなかったという。



復習にWebサービスを活用したクイズを行うことも。問題作成、音楽付きの出題、制限時間内の解答、成績表示と優勝チーム発表まで手軽にでき、生徒も毎回楽しんでいるという。

転機となったのは3年前。教員8年目にして、たまたま保健の授業の担当から1年間外れたことだ。これを区切り、今田先生は「来年度から授業をガラッと変えよう」と決心した。そして校内外の研修でアクティブラーニングの手法などを学び、校内では他教科の先生とも話し合い、授業のやり方を研究した。

そうして確立されてきたのが、「教員はほとんどしゃべらず、生徒がしゃべりやべって自分で気づきを得ていく」という今の指導のスタイルだ。

「グループ学習中心にしたというだけでなく、例えば、授業ではICTの活用を進めているのですが、使い方をいちいち説明せず、大まかなやり方だけ示し、あとは生徒たちが適切な使い方を見つけ、教え合うのを待っています。他に学級でも、終礼前に席につかず騒いでいる生徒がいても、僕からは極力指示を出さず、見守っています。気づきを待つ、ということ意識するようになったのです」

生徒はこう変わる

知識を自分のものにして
行動の選択に生かすように

今田先生が腹を据えて実施した2学期の性教育。授業のつど記入する振り返りシートを追うと、生徒がまず気づきを得て、そこから次第に日々の行動選択まで考えるようになった様子がうかがえた。中盤までの書き込みで目立つのは、授業で気づかされたことへの純粹な感想だ。「生理について知らないことがこんなに多たくさんあることに驚きました」「精子くんがこんなにも命がけでがんばっているのを知って感動しました」「卵子が生きていられるのは数時間ときいて、受精はすごい確率だと思いました」

自分のことを大切にしようと
前よりも思うようになった

—保健の授業でどんなことが印象に残っていますか？
「飲酒とか妊娠とかについて、自分たちでホームページを作ったことです。Googleの機能を使って、自分で文章を作って資料も入れて、みんなシェアするんです」
「発表するのも楽しかったです。一人で手を挙げて発表するのはなく、みんなで話し合ってホワイトボードとかにまとめて発表するので、何でも言いやすかった」
—授業で学んだことで、日常で気をつけるようになったことや、家族など他の人にも伝えたことはありますか？

「家族とたばこやお酒が体に及ぼす影響について話し合いました。外でたばこの煙を意識するようにもなりました」
「喫煙は害になるけど、飲酒は適量ならストレス解消につながるというのが面白くて両親とも話しました。危険薬物の断り方も学んだので、いつでも言えるようにしています」



2年B組の皆さん

「妊娠から出産までの流れを詳しく知ったことで、前よりも自分のことを大切にしようと思うようになりました」

それが後半、自分の体や命の神秘への理解を深めてから、中絶や避妊のことも学ぶと、自分はどうな行動を選択するか、意志の表明ともいえる記述が増えるのだ。「中絶する人のなかにも本当にたくさん理由があるので、悪いイメージだけをもつべきではないと思いました。自分の行為には責任をもつようになり」と
「中絶すると命を殺すことになり、自分の心も体も傷つく。既に子どもが産める体なのだと自覚し、今子どもができたら育てられない現実も頭に入れた」
「中絶はよくないと思う。避妊してほしいときはちゃんと言ったり、嫌なときは口に出して相手に伝えようと思った」
また、1年の終わりに生徒から寄せられた感想を見ると、保健の知識を「自分のもの」にしてほしいという意図も、多くの生徒にきちんと伝わったようだった。

「丸暗記になる教科が多い中、言葉で説明して学ぶ大切さを知ることができました」
「最初は『もう知っているよ』という姿勢で授業を受けていたけれど、人に説明しようとなると『わからない、どうして？』となって、知ること大切だと感じた。知ったうえで話す自分もなるほどと思うことがあったので、有意義な1年でした」
「何がだめなのか、ただ『だめ』ではなく自分で説明できることが大切なのだと思えました。当たり前のようで当たり前じゃない、知っているようで全然知らないことが多かったです。学べてよかった」
何より今田先生にとって嬉しく、かつ居ずまいを正されるのは、最後には生徒たちのほうが、保健を学ぶことの価値をしっかりと感じてくれたことだ。
「数学とか英語とかも大切だけど、一番将来役立つのは保健だと思いました」
「これからの人生で絶対に役立つこと、知っておかないといけないことを学べて本当に良かった。全人類に受けてほしい」
教員志望の原点である体育の授業には、今も強い思い入れがある。「でも最近それと同じかそれ以上に保健の授業が楽しいです」と今田先生は笑顔で言う。



毎授業生徒が記す振り返りシート。生徒の感想に今田先生がコメントを返し、フィードバックもしている。



思い描いている授業の在り方

目指す
生徒像

- 保健で学んだことを生かして「自分で考えて行動を選択できる」ようになる
- 指示されたことにその場だけ従うのではなく、大事だと思うことに生徒が自分で気づき、自ら行動を変えていく
- ICTを身近な文房具のように使いこなす

実社会にあるものとの連動

今または近い将来に生徒に起こりうる場面を提示して保健の知識を問う。例えば、
・大学生や社会人になってお酒をすすめられたら
・付き合う人ができたら
・受験勉強や仕事でストレスがたまったら

保健の授業

知識や能力を「活用」する場面

- ・生徒が調べたことや学んだことを、隣同士やグループで、自分の言葉で説明し合う
- ・学んだことをホームページを作成し発信
- ・記述式テストで行動選択の理由を問う

知識の「習得」や資質・能力の「育成」

- ・日常生活に結びつく保健の知識
- ・自分の考えや意見を発していく力
- ・学んだことを「行動」につなげる力
- ・ICTも活用し情報を収集・発信する力

他の教育活動との連携

学級運営や部活動でも、教師の指示は控え、生徒同士がどんな集団にしたいか意見を出し合って運営する、生徒自治を基本に

他教科の先生とも「生徒が自分で気づく・学ぶ授業」という視点から、授業展開やテスト手法、ICT活用について情報交換